

## 「生殖」から見る哲学・倫理学—ジェンダー・身体・他者をてがかりに

神戸大学 大学院人文学研究科 准教授

中 真生

(お問い合わせ先) E-MAIL: nakamao@ruby.kobe-u.ac.jp



### 研究の背景

この研究では、「生殖」という言葉を広い意味で使っています。具体的には、妊娠・出産を核としつつも、その周辺に広がるさまざまな経験、たとえば、子どもを生むかどうかを考え、選ぶことから、避妊、不妊、中絶、流産・死産、授乳、養育、そして養子縁組まで含まれます。こうした経験においては、子をもつたない、産む産まないといった、個人や性による差が大きいです。もうひとつ、より大きな視点から人間というものを見る時、人間はみな、生む身体としてあり、それはさらに、人間が生まれ、死んでいく存在であることとつながっているという、人間の身体的な存在のあり方が浮かび上がってきます。

こうした、個々の差に焦点を当てたレベルと、違いを超えた普遍的レベルの両方にわたって、「生殖」という切り口から人間を考えるのがこの研究です。生殖について、隣接する様々な学問分野に深く関連しつつも、それを哲学、倫理学として研究するものはこれまでほとんどありませんでした。

### 研究の成果

具体的な経験としては、これまでに、妊娠、中絶、不妊、授乳、生殖技術の利用をとりあげて、「身体」、「ジェンダー」、「他なるもの」の観点から考察し、発表や論文執筆を行ってきました。たとえば、女性はよく「産む性」

だと言われますが、広い意味での「生殖」は、女性だけに結び付けられるものではなく、産まない男性にも、養親や家族も含む、他の産まない人々にも共通に、その人自身のことがらとして体験されうるのであることを、「身体性」という現象学的な視点から、また具体的な経験を例にとりつつ明らかにしました。つまり、産む女性とそうでない人のあいだには、重点のおかれかたの違いはあっても、じつははっきりとした境界線はないのではないかという考えです。

このことは、「母性」というものを考え直す、別の研究成果にもつながっています。それは、生殖そのものを否定的に見るのではなく、それでいて、それを女性だけに結び付けて、「母性」という見方で正当化してしまわないあり方を考えることです。これをフランス思想との関連で考察し、日仏哲学会のシンポジウムで発表（2017年9月）したほか、日本のフェミニズム思想との関連で考察した英語論文を収録した書籍が2018年中に出版されます（*Contemporary Japanese Philosophy: A Reader*, ed. John W. M. Krummel, Rowman & Littlefield International）。そして最後に、このような生殖という観点から人間を見ることは、人間を、自分の理解や予想をはるかに超えた他なるものとの関係にあるものとして見ることであり、というのがこの研究に一貫する立場です。

### 今後の展望

本年（2018）1月の国際シンポジウムでは、予期せぬ妊娠による葛藤や育児放棄、その対策のひとつとなりうる養子縁組について扱った基礎的研究を発表しました。これまで妊娠出産前後が中心だった研究を、出産後のさまざまな経験や問題にまで広げようとしているところです。今後は、生殖全般にわたる研究の成果をさらに練り上げ、ひとつの著作にまとめたいと思っています。また、生殖に関連するさまざまな分野の、国内外の研究者と協力して共同研究を展開できたらとも考えています。

### 関連する科研費

2006–2008年度 若手研究 (B) 「悪と苦しみの倫理学」

2009–2013年度 若手研究 (B) 「苦しみと身体についての倫理学的研究」

2017–2020年度 基盤研究 (C) 「「生殖」から見る倫理学—ジェンダー・身体・他者を軸に」



拙論「The Otherness of Reproduction: Passivity and Control」が収録されている *Phenomenology of Pregnancy*, Södertörn University Press, 2016